

# 職業カテゴリーによる日本人の職業の序列付け

——「職業に貴賤なし」意識の現在——

間 淵 領 吾  
(奈良大学)

Social Grading of Occupational Categories in Japan:

How many people insist on the opinion of “Every occupation is equal” ?

MABUCHI, Ryogo

By means of social grading pattern of occupational categories, instead of occupational prestige scores, it is found that those who insist on the opinion of “Every occupation is equal” have increased from 1955 to 1995 in Japan. There is only 10.1% of male and 9.6% of female who evaluate upper white collar at the highest occupational category, lower white collar the second, blue collar the third, and farmer & fisherman the lowest in 1995 SSM survey.

キーワード：職業評価、職業カテゴリー、評定パターン、「職業に貴賤なし」

## 1. はじめに

職業移動の分析方法を大別すると、威信スコアを個々の職業に当てはめることにより個々の職業（職業小分類など）のあいだの移動を分析する方法と、比較的少数のカテゴリー（職業大分類など）のあいだにおける移動を分析する方法がある。前者の典型はパス解析であり、後者の典型は移動表の分析である。

移動表の分析は、職業間の序列を必ずしも前提にせず、職業間の移動が無差別におこなわれているか否かを分析する場合もある（強制移動率・純粋移動率・開放性係数・結合指数の分析。たとえば、原 1997:15-17、鹿又 1997:23-27、富永 1992:467-473）が、職業間の序列を想定した上でおこなわれる分析も少なくない（上昇移動率・下降移動率の分析。たとえば、富永 1979:45-55、徳安 1986:106-107）。後者の場合、従来の研究では、「農業」より「ブルーカラー」の職業的地位が高く、「ブルーカラー」より「ホワイトカラー」の職業的地位が高いことを暗黙の、あるいは明示的な前提としていることが多いのではないだろうか（古典的な例としては、Blau & Duncan 1967:58-67）。ホワイトカラーの内部に関しても、「事務職・販売職」よりは「専門職・管理職」を高く位置づける研究もある（たとえば、富永 1979:54-55）。

しかし、果たして、人々は、職業をそのように序列付けているのであろうか？ そもそも、どのような序列付けのパターンがどの程度の頻度で存在しているのであろうか？

また、職業を序列化するという自体について、人々はどのように考えているのだろうか？ 職業の序列付けと言うと、すぐに想起されるのが「職業に貴賤なし」という言葉である。この言葉は、現実には職業に貴賤があることを示唆するものであるが（さもないと、わざわざ「職業に貴賤なし」などと言う必要が無

い)、ある職業を別の職業と比較して、「高い」とか「低い」などと評価することに対して抵抗を感じる人もいるだろう。このような人は、職業を評価させる調査や職業威信スコアに対して批判を加えることもある。実際、SSM調査にもそのような抵抗や批判が加えられることがある。マスコミに登場したものとしては、1955年SSM調査による職業評価の序列に関する「職業順位表事件」が有名である(安田 1971:447-449)。職業を高いとか低いなどと評価しない「職業に貴賤なし」という意見を持つ人は、現在どの程度存在するのだろうか。それは40年前あるいは20年前と比較して変化したのであるだろうか?

従来、職業威信スコアの研究と比較して、職業の序列パターンの研究は、さほどなされてきていないようである。また、ここまで述べてきた疑問を解き明かすためには職業威信スコアは役に立たない。威信スコアは、人々のあいだの多様な序列付けのパターンを平均化し、単一の値にしてしまうからである。

本研究は、職業威信スコアとは異なる方法によって人々の職業の序列付けの仕方を見るために、職業カテゴリーの序列付けパターンに着目する。そして、1955年・1975年・1995年のSSM調査データに基づき、職業評価の序列パターンの分布状況ならびに「職業に貴賤なし」と考える人の割合の時系列的推移を明らかにしようとするものである。

## 2. 本研究で使用する職業カテゴリー

職業評価の序列パターンを分析する場合、採用しうる方法を大別すれば、(1)研究者が職業をア prioriに何らかのカテゴリー(たとえば「ホワイトカラー」・「ブルーカラー」・「農林漁業」)に分ける方法と、(2)個々の職業に対する人々の評価に基づいて何らかの手法(たとえばクラスター分析など)で評価パターンの似た職業をまとめ、その職業グループ間で比較する方法、という2つがありうる。本研究では、既存の調査結果との比較によって時系列的变化を見る必要から、また、既存の研究成果を解釈する際の一助としようとする理由から、前者すなわちア prioriな分類に基づく方法を採用することにした。

本研究では比較対象とする既存調査の違いによって下記の3タイプのカテゴリーを使い分けることにする。タイプ1は、SSM調査に基づく諸研究で採用されているSSM職業総合分類あるいはSSM職業大分類と関連付けて考察するためのものである<sup>1)</sup>。タイプ2は、1955年SSM調査における質問項目との比較を試みるためのものである。また、タイプ3は、国民性調査における質問項目との比較を試みるためのものである。

タイプ1: 「上層ホワイトカラー」・「一般ホワイトカラー」・「ブルーカラー」・「農林漁業」

タイプ2: 「物を作っている人々」・「物を売り買いする人々」・「学者や芸術家」・「役人や議員」

タイプ3: 「実際に必要な物を作ったり、売り買いする仕事をしている人」と「学者や芸術家などのような人」

### 2.1. 職業カテゴリー・タイプ1の構成要素

職業を「上層ホワイトカラー」・「一般ホワイトカラー」・「ブルーカラー」・「農林漁業」というカテゴリーに分ける場合、それぞれのカテゴリーに含まれる個々の職業は、表1のとおりとする。

なお、本研究では、SSM95年威信票データとSSM75年威信票(B票)データを比較するため、これら2つの調査で重複して質問されている職業に限定した。

また、各職業カテゴリーとSSM職業大分類との関係は、それぞれ表1の右欄のとおりである。

表1. 序列パターンの作成に使用した職業と職業カテゴリー

職業4分類	No	1995年職業名(問3)	No	1975年調査職業名(問4)	SSM大分類
1 上層ホワイトカラー	7	医師	12	医師	1 専門的職業
	10	建築士	82	土木建築技術者	
	11	看護婦	19	看護婦	
	15	大学教授	24	大学教授	
	19	保母	33	保母	
	21	服飾デザイナー	38	デザイナー	
	25	小学校の教諭(先生)	44	小学校の教諭(先生)	
	27	プロスポーツ選手	47	プロスポーツ家	
	32	裁判官	54	裁判官	
	35	パイロット	21	パイロット	
	38	寺の住職	64	寺の住職	
	50	公認会計士	75	公認会計士	2 管理的職業
	52	薬剤師	17	薬剤師	
	53	自動車設計技術者	72	機械工業技術者	
	56	音楽家	48	音楽家	
	1	大会社の社長	1	大会社の社長	
	8	中小企業の経営者	14	中小企業の経営者	
	23	中小企業の課長	41	中小企業の課長	
	24	高級官僚	42	高級官僚	
	41	国会議員	66	国会議員	
	43	市役所の課長	68	市役所の課長	
47	大会社の課長	74	大会社の課長		
2 一般ホワイトカラー	6	大会社の営業担当社員	10	大会社の企画・営業担当社員	3 事務的職業
	17	鉄道の駅員	30	鉄道の駅員	
	18	郵便配達人	32	郵便配達夫	
	22	警察官	39	警官	
	34	守衛	46	守衛	
	49	中小企業の事務員	79	中小企業の一般事務員	
	39	銀行員	62	会計事務員	
	54	銀行の窓口係	62	会計事務員	4 販売的職業
	5	ウェイトレス	8	ウェイトレス	
	9	スチュワーデス	16	スチュワーデス	
	13	自動車セールスマン	22	セールスマン	
	36	商店の店員	59	商店の店員	
	40	小売店主	65	小売店主	
	45	保険の勧誘員	73	保険の勧誘員	
51	卸売店主	81	卸売店主		
3 ブルーカラー	2	電気工事人	4	電気工事人	5 熟練的職業
	3	レストランのコック	11	レストランのコック	
	4	大工	6	大工	
	20	土木・建築の監督者	37	工場や現場の監督者	
	26	理容師(理髪師)	45	理容師	
	30	印刷工	50	印刷工	
	37	パン製造工	63	パン製造工	
	44	家具職人	71	指物師	6 半熟練的職業
	46	自動車修理工	27	自動車修理工	
	31	紡績工	52	紡績工	
	33	バス運転手	55	自動車運転手	
	48	電車運転士	76	電気機関士	
	55	食品缶詰工	40	食品缶詰工	
	14	炭坑夫	23	採炭夫	
42	道路工夫	67	道路工夫		
4 農林水産	16	漁業者(漁師)	29	漁業者(漁師)	8 農林的職業
	29	農業	49	自作農	

## 2.2. 職業カテゴリー・タイプ2の構成要素

職業を「物を作っている人々」・「物売り買いする人々」・「学者や芸術家」・「役人や議員」というカテゴリーに分ける場合、それぞれのカテゴリーに含まれる個々の職業は、以下のとおりとした。

(1) 1995年SSM調査データを使用する場合：

「物を作っている人々」：電気工事人、レストランのコック、大工、大企業の機械組立工、中小企業の機械組立工、炭坑夫、漁業者（漁師）、農業、印刷工、紡績工、パン製造工、道路工夫、家具職人、自動車修理工、食品缶詰工。

「物売り買いする人々」：ウェイトレス、自動車セールスマン、商店の店員、小売店主、保険の勧誘員、卸売店主。

「学者や芸術家」：大学教授、服飾デザイナー、音楽家。

「役人や議員」：高級官僚、裁判官、国会議員、市役所の課長。

(2) 1975年SSM調査データを使用する場合：

「物を作っている人々」：電気工事人、レストランのコック、大工、テレビ組立工、採炭夫、漁業者（漁師）、自作農、印刷工、紡績工、パン製造工、道路工夫、指物師、自動車修理工、食品缶詰工。

「物売り買いする人々」：ウェイトレス、セールスマン、商店の店員、小売店主、保険の勧誘員、卸売店主。

「学者や芸術家」：大学教授、デザイナー、音楽家。

「役人や議員」：高級官僚、裁判官、国会議員、市役所の課長。

## 2.3. 職業カテゴリー・タイプ3の構成要素

「実際に必要な物を作ったり、売り買いする仕事をしている人」：職業カテゴリー・タイプ2の「物を作っている人々」と「物売り買いする人々」に含まれる職業。

「学者や芸術家などのような人」：職業カテゴリー・タイプ2の「学者や芸術家」と同一。

## 3. 職業の評定パターン

ところで、職業を4つのカテゴリーに分けた場合、評定パターンは全部で何通りありうるのだろうか。

これら4種類の職業に順位を付けるということは、4つの職業カテゴリーについて順位を示す1～4の番号の中からそれぞれ1つを選択することに他ならない。したがって、その評定パターンの数は素朴に考えれば、 $4^4=256$ 通りとなるが、ここでは以下の配列規則を設けることにより、パターンの数は大幅に減少する。

まず、評定パターンの表示方法について、説明しておこう。本研究では、各職業カテゴリーの順位を職業カテゴリーの順に羅列して表示することにする。たとえば、前述の職業カテゴリー・タイプ1の場合、「上

「上層ホワイトカラー」を第1位、「一般ホワイトカラー」を第2位、「ブルーカラー」を第3位、「農林漁業」を第4位に位置つけた評価パターンは、〈1 2 3 4〉と表記することにする。

次に、以下の配列規則を設けるものとする。

配列規則1-1：同順位のカテゴリーがある場合は、それに続く順位を繰り下げる。

配列規則1-2：すべての職業分類の評価が同列の場合、〈1 1 1 1〉と表記する。

配列規則1-3：いずれかの職業カテゴリーの評価が欠損値の場合、〈9 9 9 9〉というコードを与える。

したがって、配列規則1-1により、たとえば、「上層ホワイトカラー」「一般ホワイトカラー」「ブルーカラー」を同等に評価し、なおかつ、それらを「農林漁業」よりも高く位置づける評価パターンは、〈1 1 1 2〉ではなく、〈1 1 1 4〉と表記される。

また、配列規則1-2により、〈2 2 2 2〉×〈3 3 3 3〉×〈4 4 4 4〉という評価パターンは存在しない。

たとえば、「上層ホワイト」を第1位とした場合、4つの職業カテゴリーに関して考えられる評価パターンは、表2に示した64通りからイタリック体に網掛けを施したセルの38通りを除いた26通りである。

このようにして得られる評価パターンの組合せの数は、以下のとおりである。

- ①4つの職業カテゴリーに「1」を与える場合：パターン〈1 1 1 1〉の1通りのみ。
- ②3つの職業カテゴリーに「1」を与える場合：残りの3カテゴリーに「4」を与えるパターンが4通り。
- ③2つの職業カテゴリーに「1」を与える場合：「1」を与えうるカテゴリーの組合せは ${}_4C_2 = 6$ 通り。  
残りの2カテゴリーには「3, 3」「3, 4」「4, 3」しか与えられない。∴  $3 \times 6 = 18$ 通り。
- ④1つの職業カテゴリーに「1」を与える場合：「1」を与えうるカテゴリーは4つ。  
残り3カテゴリーが「2」の場合：1通り。  
残り2カテゴリーが「2」の場合：その残り2カテゴリーには「3」および/または「4」しか与えられないので組合せは3通り。  
残り1カテゴリーが「2」の場合：「2」を与えうるカテゴリーは3つ。残り2カテゴリーには「3, 3」「3, 4」「4, 3」しか与えられない。∴  $3 \times 3 = 9$ 通り。
- ⑤どの職業カテゴリーにも「1」を与えない場合：パターン〈9 9 9 9〉の1通りのみ。

以上から、4つの職業カテゴリーに関する評価の順列として考えられるパターンの数は、以下のとおり。

$$1 + 4 + 18 + 4 \times (1 + 3 + 9) + 1 = 76 \text{通り}$$

表2. 上層ホワイトが第1位である場合の評価パターン

<b>1111</b>	<i>1112</i>	<i>1113</i>	<b>1114</b>	<i>1121</i>	<i>1122</i>	<i>1123</i>	<i>1124</i>	<i>1131</i>	<i>1132</i>
<b>1133</b>	<b>1134</b>	<b>1141</b>	<i>1142</i>	<b>1143</b>	<i>1144</i>	<i>1211</i>	<i>1212</i>	<i>1213</i>	<i>1214</i>
<i>1221</i>	<b>1222</b>	<i>1223</i>	<b>1224</b>	<i>1231</i>	<i>1232</i>	<b>1233</b>	<b>1234</b>	<i>1241</i>	<b>1242</b>
<b>1243</b>	<i>1244</i>	<i>1311</i>	<i>1312</i>	<b>1313</b>	<b>1314</b>	<i>1321</i>	<i>1322</i>	<b>1323</b>	<b>1324</b>
<b>1331</b>	<b>1332</b>	<i>1333</i>	<i>1334</i>	<b>1341</b>	<b>1342</b>	<i>1343</i>	<i>1344</i>	<b>1411</b>	<i>1412</i>
<b>1413</b>	<i>1414</i>	<i>1421</i>	<b>1422</b>	<b>1423</b>	<i>1424</i>	<b>1431</b>	<b>1432</b>	<i>1433</i>	<i>1434</i>
<i>1441</i>	<i>1442</i>	<i>1443</i>	<i>1444</i>						

注. 配列規則に基づき、ありえないパターンには網掛けを施した。

#### 4. 評定パターン変数の作成手順

次に、職業カテゴリーの評定パターン変数の作成手順について説明する。

##### 4.1. データ

1995年データ・1975年データともに、各職業を5段階で評価してもらっており、いずれも選択肢は下記のとおりである。

1. 最も高い
2. やや高い
3. ふつう
4. やや低い
5. 最も低い

本研究では、1995年ならびに1975年に関して、このデータに基づき、各時点における日本人の職業評価の序列パターン変数を作成することにする。

なお、1955年SSM調査では、問33で32種類の職業について評価を求めており、その結果から職業威信スコアが算出されているが、オリジナル・データは残存していないため、1995年・1975年と同様の分析を行うことはできない<sup>2)</sup>。ただし、問35では4つの職業カテゴリーの評価を質問しており、そのデータは利用可能なので、本研究ではこれも利用する。

##### 4.2. 職業評価の平均値

職業威信スコアと関連させて考察するために、職業威信スコアと同様に、「1. 最も高い」を100点、「2. やや高い」を75点、「3. ふつう」を50点、「4. やや低い」を25点、「5. 最も低い」を0点として、上記の4つの職業カテゴリーについて回答者毎に職業評定の平均得点（以下、簡便のため「評定得点」と呼ぶ）を算出した。

##### 4.3. 順位への変換

次に、表計算ソフトの関数（ここでは、MS-ExcelのRank関数）を利用して評定得点から職業カテゴリー毎に「評定得点」を「順位」に変換した。これにより、4つの職業カテゴリーが順位付けられたことになる。ここでは、この順位を「暫定順位」と呼ぶことにする。

ただし、このままでは、たとえば<1 1 1 1>という序列パターンは、4つの職業カテゴリーの評定得点が厳密に一致している場合のみとなる。人々が職業の序列を判定する際、そこまで厳密には判定していないと推測し、本研究では、下記の変換規則に従って順位を変更した。これによって最終的な順位が確定されたことになる。ここでは、この順位を「確定順位」と呼ぶことにする。

変換規則2-1：順位が隣り合う2つの職業カテゴリーの評定得点の差が12.5点未満の場合、それらの職業カテゴリーを同順位とみなす。

変換規則2-2：順位が隣接する3つの職業カテゴリーの評定得点の差が25.0点未満の場合、それらの職業カテゴリーを同順位とみなす。

変換規則2-3：最上位の職業カテゴリーの評定得点と最下位の職業カテゴリーの評定得点の差が25.0点未満の場合は、全職業カテゴリーを同順位とみなす。

変換規則2-4：以上の規則によって処理できない場合、暫定順位をそのまま確定順位とする。

なお、同順位とみなすか否かの閾値を、変換規則2-1で12.5点とし、変換規則2-2と変換規則2-3で25.0点とした理由は、前項で述べたとおり各職業の評定を25点刻みにして評定得点を算出したことにある。

#### 4.4. 序列パターン変数の作成

次式に基づき、職業カテゴリー毎の順位変数から序列パターン変数 (P) を作成した。

$$P = X_1 \times 1,000 + X_2 \times 100 + X_3 \times 10 + X_4 \times 1$$

ただし、 $X_1$  : 上層ホワイトカラーの順位、 $X_2$  : 一般ホワイトカラーの順位、 $X_3$  : ブルーカラーの順位、 $X_4$  : 農林水産的職業の順位

表3は、各職業カテゴリーの評価得点、その順位、評定パターンの実例である。

表3. 評定パターンの実例

評定得点				暫定順位				暫定パターン	確定パターン
uw	lw	blue	farm	uw_rank	lw_rank	bl_rank	f_rank	job4rank	pattern
73.9	55.0	51.7	50.0	1	2	3	4	1234	1111
77.3	50.0	56.7	75.0	1	4	3	2	1432	1432
78.4	61.7	51.7	50.0	1	2	3	4	1234	1222
54.5	50.0	50.0	50.0	1	2	2	2	1222	1111

註. uw; lw ;blue; farm : 順に上層ホワイト・一般ホワイト・ブルーカラー・農林水産業の評定得点  
 uw\_rank; lw\_rank; bl\_rank; f\_rank : 順に上層ホワイト・一般ホワイト・ブルーカラー・農林水産業の暫定順位  
 job4rank : uw\_rank~f\_rankから作成された暫定評定パターン  
 pattern : 変換規則に従って修正された確定評定パターン

#### 5. 評定パターンの分布

1975年ならびに1995年SSM調査データから上記の手順によって作成された評定パターンの分布は、表4のとおりである。表から読み取れることは下記のとおりである。

##### 5.1. 1995年調査の結果

- (1) 回答パターンの数は、〈9999〉を含めると、男性では22通り、女性では19通りである。
- (2) 最も回答者が多いのは、男女ともに〈1111〉すなわち「職業に貴賤なし」というパターンであり、男性39.4%、女性42.6%となっている。これについて多いのは、男女ともに〈1222〉という回答パターン（「上層ホワイト」とそれ以外の職業という2分法であり、「上層ホワイト」を高く位置付ける考え方）であり、男性28.1%、女性26.4%となっている。男女ともに、この2つのパターンで全体の過半数を占めている（男性67.5%、女性69.0%）。
- (3) 〈1234〉（「上層ホワイト」が最も高く、以下順に「一般ホワイト」「ブルーカラー」「農林水産業」と位置付ける考え方）は、男性だと10.1%、女性だと9.6%となっており、比較的少ない。
- (4)  $\chi^2$ 検定の結果、評定パターンの分布に男女差は見られない（ $\chi^2=17.99152$ ,  $df=22$ ,  $Prob.=.70649$ ）。

表4. 評定パターンの分布 (%)

	1975年 男性	1995年 男性	1995年 女性	1995年 -1975 年	1995年 男-女
1111	28.4	39.4	42.6	11.0	-3.2
1114	0.4	0.5	0.3	0.1	0.2
1133	0.1			-0.1	0.0
1134	0.2			-0.2	0.0
1222	27.9	28.1	26.4	0.2	1.7
1224	3.9	4.1	5.2	0.2	-1.1
1233	1.6	1.2	1.1	-0.4	0.1
1234	13.0	10.1	9.6	-2.9	0.5
1242	2.5	0.9	1.1	-1.6	-0.2
1243	3.7	2.3	1.7	-1.4	0.6
1313	0.1			-0.1	0.0
1314	0.1			-0.1	0.0
1323	0.2			-0.2	0.0
1324	3.3	2.1	3.1	-1.2	-1.0
1331	1.1	0.9	0.8	-0.2	0.1
1332	0.5	0.4		-0.1	0.4
1341	0.1			-0.1	0.0
1342	6.6	2.3	1.5	-4.3	0.8
1411	0.1			-0.1	0.0
1423	0.3	0.2	0.3	-0.1	-0.1
1432	2.0	1.9	1.7	-0.1	0.2
2134	0.1			-0.1	0.0
2221	0.8	1.1	0.3	0.3	0.8
2331			0.2	0.0	-0.2
2341	0.4	0.4	0.3	0.0	0.1
2421		0.4		0.4	0.4
2431	0.6	0.5	0.8	-0.1	-0.3
3241	0.1			-0.1	0.0
3311		0.4		0.4	0.4
3321		0.2		0.2	0.2
3421	0.1	0.2	0.5	0.1	-0.3
4111	0.1			-0.1	0.0
4321	0.1			-0.1	0.0
9999	1.9	2.7	2.6	0.8	0.1
N	1,296	566	648		

(4) 1975年と1995年に共通して言えることだが、〈1234〉という評価をする者は、10%ほどしかいない。

## 5.2. 1975年調査の結果

(1) 回答パターンの数は、〈9999〉も含めると、30通りである。

(2) 回答者が最も多いのは〈1111〉(28.4%)、第2位は〈1222〉(27.9%)であり、この2つのパターンで全体の過半数(56.3%)を占めている。

(3) 〈1234〉というパターンは、13.0%にとどまっている。

## 5.3. 1975年と1995年の比較 (男性のみ)

(1) 評定パターンの数は、〈9999〉を含めると、1975年調査(男性のみ)では30通りであったが、1995年調査では22通り(男性に限定)となっており、職業評価についてのばらつきが減少し、社会的合意が高まったことが推測できる。

(2) 1975年・1995年ともに、10%を越す主要な評定パターンは、〈1111〉×〈1222〉×〈1234〉という3種類にとどまっており、そもそも職業評定に関しては社会的合意が比較的高いと言える。

(3) 〈1111〉(職業に貴賤なし)は、1975年には28.4%であったが、1995年には39.4%となった。

表4の評定パターンで「上層ホワイト」と「一般ホワイト」の相違を無視し、「ホワイトカラー」「ブルーカラー」「農林水産」の3カテゴリーについて見てみると、比較的想定されがちな以下の3パターンを支持する人は、現実には少ないことがわかる(表5)。

- ①<1134>または<1234>: ホワイト>ブルー>農林水産
- ②<1133>または<1233>: ホワイト>ブルー=農林水産
- ③<1114>または<1224>: ホワイト=ブルー>農林水産

表5. 職業3カテゴリーの序列関係(1975年・1995年SSM調査: 男性、%)

	1975年男性	1995年男性	1995年女性
ホワイト>ブルー>農林水産			
<1134>	0.2	0	0
<1234>	13.0	10.1	9.6
ホワイト>ブルー=農林水産			
<1133>	0.1	0	0
<1233>	1.6	1.2	1.1
ホワイト=ブルー>農林水産			
<1114>	0.4	0.5	0.3
<1224>	3.9	4.1	5.2

また、表4に基づいて職業カテゴリーの二対比較をした結果が表6である。

1995年について見てみると、上層ホワイトを一般ホワイトやブルーカラーや農林水産業より高く位置付ける人は、いずれも5割台に過ぎないことがわかる。また、1975年と比較してその比率は減少傾向にある。1995年の場合、一般ホワイトについては、7割前後の人がブルーカラーや農林水産業と同列に評価している。

1985年SSM調査では、専門・管理・事務のあいだの移動の増大という事実に対して、「3階層間のランク格差縮小仮説」の妥当性が高いと主張された(盛山・直井・佐藤・都築・小島 1990:42)。本研究では、専門・管理から構成される「上層ホワイト」と事務・販売から構成される「一般ホワイト」に対する人々の評定結果を明らかにすることができた。「一般ホワイト」より「上層ホワイト」を高く評価する人の割合は、1975年SSM調査では68.1%であったが、1995年調査では55.8%となり、12ポイント減少した。一方、両者を同等に評価する人の割合は、29.8%から41.5%となり、12ポイント増加した。少なくとも職業評定という主観的なレベルにおいては、専門・管理と事務・販売のあいだのランク格差は縮小したといえることができるだろう。

表6. 職業カテゴリーの二対比較 (1975年・1995年SSM調査: 男性、%)

	SSM75	SSM95	'95-'75
上層ホワイト > 一般ホワイト	68.1	55.8	-12.2
上層ホワイト = 一般ホワイト	29.8	41.5	11.7
上層ホワイト < 一般ホワイト	0.3	0.0	-0.3
DK,NA	1.9	2.7	0.8
計	100.0	100.0	
上層ホワイト > ブルー	68.1	55.3	-12.8
上層ホワイト = ブルー	29.8	41.3	11.6
上層ホワイト < ブルー	0.2	0.7	0.5
DK,NA	1.9	2.7	0.8
計	100.0	100.0	
上層ホワイト > 農林水産	66.4	54.1	-12.4
上層ホワイト = 農林水産	29.6	40.3	10.7
上層ホワイト < 農林水産	2.1	3.0	0.9
DK,NA	1.9	2.7	0.8
計	33.6	45.9	
一般ホワイト > ブルー	28.2	17.1	-11.1
一般ホワイト = ブルー	63.0	74.4	11.3
一般ホワイト < ブルー	6.9	5.8	-1.0
DK,NA	1.9	2.7	0.8
計	100.0	100.0	
一般ホワイト > 農林水産	26.3	20.3	-6.0
一般ホワイト = 農林水産	59.2	68.4	9.2
一般ホワイト < 農林水産	12.7	8.7	-4.0
DK,NA	1.9	2.7	0.8
計	100.0	100.0	
ブルー > 農林水産	21.5	17.0	-4.6
ブルー = 農林水産	58.1	69.1	11.0
ブルー < 農林水産	18.5	11.3	-7.2
DK,NA	1.9	2.7	0.8
計	100.0	100.0	

注. 等号ならびに不等号は、職業カテゴリーの序列の上下関係を示す。  
「上層ホワイト > 一般ホワイト」は、上層ホワイトが一般ホワイトより上に位置付けられていることを示す。

次に、表4の評定パターンと前述した暫定パターンのクロス集計を表7ならびに表8に示した。これにより、どの暫定パターンからどの評定パターンに件数が流れ込んだのかわかる。

たとえば、1995年SSM調査における<1111>について見てみると、4つの職業カテゴリーを厳密に同等に評価している者は40名だが、評定結果がほぼ同等（25点刻みの5段階評定で、最大でも25点の範囲内）であるために<1111>と見なされた者は459名いることがわかる。この459名は、回答者全体の37.8%にのぼる。

これと同様の状況をその他の評定パターンにも見出すことができる。

表7. 暫定評定パターンと確定評定パターンの関係 (1995年S SM調査・男女計、人数)

	1111	1114	1222	1224	1233	1234	1242	1243	1324	1331	1332	1342	1423	1432	2221	2331	2341	2421	2431	3311	3321	3421	9999	計
1111	40																							40
1222	78		1																					79
1224	18	1	25	4																				48
1233	89		28		4																			121
1234	37	3	118	49	10	119																		336
1242	28						11																	39
1243	36		63					24																123
1323	22		2																					24
1324	29	1	18	4					32															84
1331	1																							1
1332	16		9							1														26
1341	1																							1
1342	29		42				1			2	2	23												99
1411	1																							1
1422	9		5																					14
1423	12		9										3											24
1431	2																							2
1432	26		10											22										58
2313	1																							1
2331	1									4														5
2341	4																4							8
2413	1																							1
2431	11									3					4	1		2	8					29
3241	2																							2
3411	1																							1
3421	2														4					1	1	4		12
4111	1																							1
4321	1																				1			2
9999																							32	32
計	499	5	330	57	14	119	12	24	32	10	2	23	3	22	8	1	4	2	8	2	1	4	32	1214

注 表側：「暫定パターン」、表頭：「確定パターン」。

表8. 暫定評定パターンと確定評定パターンの関係 (1975年S SM調査・男性のみ、人数)

	1111	1114	1133	1134	1222	1224	1233	1234	1242	1243	1313	1314	1323	1324	1331	1332	1341	1342	1411	1423	1432	2134	2221	2341	2431	3241	3421	4111	4321	9999	計	
1111	8																														8	
1222	43				2																										45	
1224	1					2																									3	
1233	32				11		7																								50	
1234	36	3	1	2	135	43	13	168																							401	
1242	15								26																						41	
1243	39				84		1		2	48																					174	
1323	10				7						1	2																			20	
1324	20	1			18	6						1	1	43																	90	
1332															1																1	
1341	3														2																5	
1342	41				73				5						7	5	1	85													217	
1422	17				5																										22	
1423	13				7														1	4											25	
1431	2																														2	
1432	40				19										1	2						26									88	
2134	1	1																				1									3	
2143	1																														1	
2241																							1								1	
2313	2																														2	
2314	1																														1	
2341	12														2									2	5						21	
2412	1																														1	
2413	1																														1	
2431	7														1								3	8							19	
3241	2																										1				3	
3411	2																														2	
3412	1																														1	
3421	6																							1			1				8	
4111	1																														1	
4131	1																														1	
4212	1																														1	
4213	1																														1	
4231	2																							1							3	
4311	3																														3	
4321	2																							2					1	1		6
9999																								2								24
計	368	5	1	2	361	51	21	168	33	48	1	1	3	43	14	7	1	85	1	4	26	1	10	5	8	1	1	1	1	24	1296	

## 6. 評定のランク数

ここで、4つの職業カテゴリーに関する評定パターンが何段階になっているのかを、1975年と1995年の男性について比較してみよう。

1975年と比べると、1995年には4つの職業カテゴリーを4段階や3段階に位置付ける人は減少し、1段階ないし2段階に位置付ける人が増加したことがわかる(表9)。具体的に言えば、4つの職業カテゴリーを4段階に位置付ける人は、1975年調査では30.2%であったが、1995年調査では20.0%となっており、10.2ポイント減少している。3段階についても、1975年は9.2%であったものが、1995年は7.1%であり、2.1ポイントの減少となっている。

表9. 評定パターンの段階数 (SSM調査・男性のみ、%)

N of ranks	'75	'95	'95-'75
1	28.4	39.4	11.0
2	30.4	30.9	0.5
3	9.2	7.1	-2.1
4	30.2	20.0	-10.2
DK, NA	1.9	2.7	0.8
Total	100.0	100.0	

## 7. 1955年SSM調査との比較

1955年に実施された第1回SSM調査には、職業威信スコアを算出するために個々の職業について評価してもらう項目(問34)があるが、この項目はデータが現存していないため、1955年に関しては1975年や1995年のように職業評定パターンを算出することができない。

しかし、1955年SSM調査には、職業カテゴリーの序列付けならびに「職業に貴賤なし」意識について直接に質問している項目があり、この項目に関するデータは現在も利用可能な状態である。「物を作っている人々」「物を売り買いする人々」「学者や芸術家」「役人や議員」という4つの職業カテゴリーを比較して、いずれが社会的に価値が高いかを質問している問35がそれである。この問に対して「皆同じだ(職業に上下の別はない)」と回答した者はわずか4.1%であった<sup>3)</sup>。

ただし、この質問はそれ以後のSSM調査では採用されていないため、そのままでは時系列的比較が不可能である。そこで、本研究では、以下の工夫をすることにより敢えて比較を試みることとした。

まず、1955年SSM調査の問35における職業カテゴリーに従って、先ほどと同様の手順で、1975年調査と1995年調査のデータについて改めて評定パターンを求める。その際、回答者の回答メカニズムについて、以下の2点を仮定することにした。

仮定1 : ある職業カテゴリーを単独1位とする評定パターンの回答者は、その職業を「社会的地位が最も高い職業」と回答するだろう。

仮定2 : 複数の職業カテゴリーを同列1位とする評定パターンの回答者は、「一概には言えない」と回答するだろう。

これらの仮定をおくことによって、われわれは1975年データならびに1995年データから1955年調査の間35に対するのと同様の回答を推測的に求めることが可能となる。表10に、1975年調査データならびに1995年調査データについて推定された回答の分布を1955年調査で現実にも得られた回答分布とともに示した。この表から以下のことが読み取れる。

- ① 「物を作っている人々」を最も高いと回答する人は、1955年には37.1%を占めていたが、その後、1%前後にまでに激減した（1975年：0%、1995年：1.1%）。
- ② 「物を売り買いする人」を最も高いと回答する人は、1955年・1975年・1995年のいずれの調査でも極めて少数である。
- ③ 「学者や芸術家」を最も高いと回答する人は、1955年には32.4%であったが、1割前後（1975年：7.0%、1995年：10.8%）まで減少した。
- ④ 「役人や議員」最も高いと回答する人は、1955年には16.5%であったが、1975年には大きく増加して42.1%となった。しかし、その後は減少し、1995年には25.8%となっている。
- ⑤ 「職業に貴賤なし」（1955年SSM調査では「皆同じだ（職業に上下の別はない）」）と回答する人は、1955年はわずか4.1%に過ぎないが、1975年には10.7%、1995年には22.1%となっており、20年毎にそれぞれ2倍以上の伸びを示している。
- ⑥ 「一概には言えない」と回答する人は、1955年には5.7%と少なかったが、1975年には34.8%、1995年も37.6%となっており、1955年以降に激増した。

厳密な比較はできないものの、1955年から1995年までの40年間で時系列比較をした場合も、「職業に貴賤なし」と考える人は増加してきたことが推測できる。また、戦後復興期ならびに高度成長期には生産労働者を高く評価する人が少なくなかったが、低成長期に入るとその評価が下がったことや、役人・議員に対する評価が近年低下傾向にあることもうかがえて興味深い。

表10. 社会的地位が最も高い職業（SSM調査・男性のみ、%）

	1955年	1975年	1995年
物を作っている人々	37.1	0.0	1.1
物を売り買いする人々	2.3	0.0	0.0
学者や芸術家	32.4	7.0	10.8
役人や議員	16.5	42.1	25.8
<b>職業に貴賤なし</b>	<b>4.1</b>	<b>10.7</b>	<b>22.1</b>
一概には言えない	5.7	34.8	37.6
その他	0.2	—	—
D.K.	1.7	5.4	2.7
計	100.0	100.0	100.0

註：1955年は現実の回答分布。1975年・1995年は推定された回答分布。

## 8. 国民性調査との比較

文部省統計数理研究所が5年毎に実施している「日本人の国民性」調査には、初期の5回のみ、職業の社会的価値を評定させる質問項目があった。ここでは、その結果と1975年・1995年SSM調査の結果を比較してみることにしよう。

国民性調査では、「実際に必要な物を作ったり、売り買いする仕事をしている人」と「学者や芸術家などの

ような人」を比較して、どちらが社会的に見て価値が高いと思うかと質問している。「職業に貴賤なし」の比率は、1953年は25%、1958年は16%、1963年は28%、1968年は23%、そして1973年は30%と推移しており、一貫した傾向は見出しにくいものの、53年から73年にかけては2～3割前後を推移していたことがわかる<sup>4)</sup>。国民性調査で「仕事の価値」と呼ばれているこの項目は、残念ながら1978年以降の調査では採用されていない(統計数理研究所1994)。

1975年ならびに1995年のSSM調査データを利用して、国民性調査と同様の職業カテゴリーについて評定パターンを求めてみると、「職業に貴賤なし」の比率は、1975年SSM調査(男性のみ)では37.0%であったが、1995年SSM調査(男女計)では48.2%となっており、やはり増加していることが確認できた。

以上の諸結果を要約したのが表11である。1955年～1995年の40年間で「職業に貴賤なし」と考える日本人は増加した、と言える。

表11. 「職業に貴賤なし」の比率(%)

	'53年	'55年	'58年	'63年	'68年	'73年	'75年	'95年
SSM調査(1)							28.4	39.4
SSM調査(2)		4.1					10.7	22.1
国民性調査(3)	25		16	28	23	30		
SSM調査(4)							37.0	48.2

註(1): 「上層ホワイト」「一般ホワイト」「ブルー」「農林水産」について算出(いずれも男性)。

(2): 1955年の値は1955年SSM調査の問35の回答結果(男性のみ)。

1975年・1995年の値は、1955年の質問におけるカテゴリーに合わせて算出(いずれも男性)。

(3): 統計数理研究所国民性調査委員会(1975:142)。

(4): 国民性調査のカテゴリーに合わせて算出(1975年は男性、1995年は男女計)。

なお、算出に当たっては、2つの職業カテゴリーの評定得点の差が25.0点以内の場合、回答者は「職業に貴賤なし」と考えているものとした。

## 9. 「職業に貴賤なし」の分析

ここまでは、「職業に貴賤なし」の分布状況を時系列的に検討してきたが、以下では、どのような属性の人が「職業に貴賤なし」と考えるのかという点を分析していくことにする。

安田三郎は「職業に貴賤なし」は、社会階層の上層に位置するものにとっては保身のイデオロギー装置として機能し、下層に位置するものにとっては自らの不遇を慰め、自尊心を維持するためのイデオロギー装置として機能する」という仮説を提示している(安田1971:448-449)。この仮説に従えば、「職業に貴賤なし」という回答は、社会階層の両極端に多く、中間層に少ないだろう、ということが予測できる。

社会的地位の指標として、学歴・職業階層・所得に着目すれば、具体的には以下のような予測をたてることができる。

「学歴」に関する予想: 「職業に貴賤なし」は、高学歴層ならびに低学歴層で多く、中間層で少ないだろう。

「職業階層」に関する予想: 「職業に貴賤なし」は、職業階層の高い層ならびに低い層で多く、中間層で少ないだろう。

「所得」に関する予想: 「職業に貴賤なし」は、高所得層ならびに低所得層で多く、中間層で少ないだろう。他方、数次にわたる国民性調査の結果によれば、「職業に貴賤なし」という意見には、以下の特徴が見られ

ると報告されている。

- (1) 年齢差：常に効果なし（統計数理研究所国民性調査委員会 1975:143-144）。
- (2) 学歴差：常に高学歴層ほど多い（統計数理研究所国民性調査委員会 1975:143-144）。大卒だと3～5割であるのに対し、小卒だと1～2割となっている。
- (3) 職業差：第IV次調査(1968年)の場合、専門職・管理職で比較的多く、それぞれ49%、46%であるが、その他の職種では相対的に少ない(大企業事務職：34%、農林漁業：18%、大企業労働：19%、単純労働：9%など)（統計数理研究所国民性調査委員会 1970:136-137）。

国民性調査の結果から言えば、学歴については、階層の高い者ほど「職業に貴賤なし」と回答していることになる。職業については、階層的地位の高いものが「職業に貴賤なし」と回答する傾向が見出された場合もあるが、系統的にそのような結果が見られるわけではないようである。

S S M調査データによって、安田仮説の検証ならびに国民性調査との比較を試みてみよう。なお、1975年調査は男性のみのデータであるため、比較対照とする1995年データも男性に限定する。

まず、「職業に貴賤なし」と考えているか否かと「年齢」・「学歴」・「職業」・「世帯収入」をクロス集計してみた<sup>5)</sup>。χ<sup>2</sup>検定の結果、危険率を10%に設定しても、1975年・1995年ともに有意となるものは1つもなかった。クロス表レベルでは、年齢効果・学歴効果・職業効果・収入効果はいずれも見られない(図1～4)。

図1. 「職業に貴賤なし」(年齢別：10歳刻み、%)

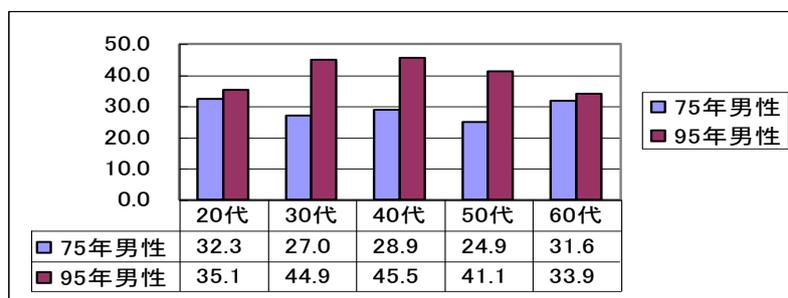
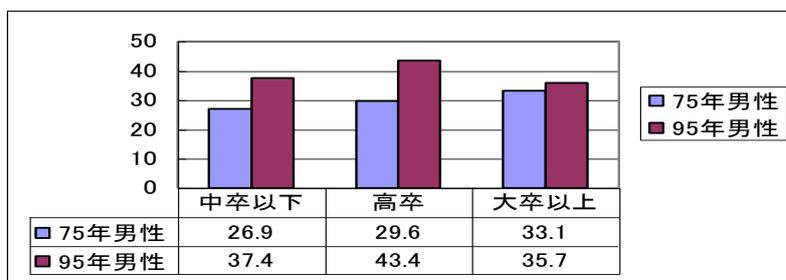


図2. 「職業に貴賤なし」(学歴別：4段階、%)



注 「中卒以下」：尋常小学校卒・高等小学校卒・新制中学卒、「高卒」：旧制中学卒・新制高校卒、「大卒」：旧制高校・高専・大学卒・新制大学・大学院卒

図3. 「職業に貴賤なし」(職業別：SSM職業8分類、%)

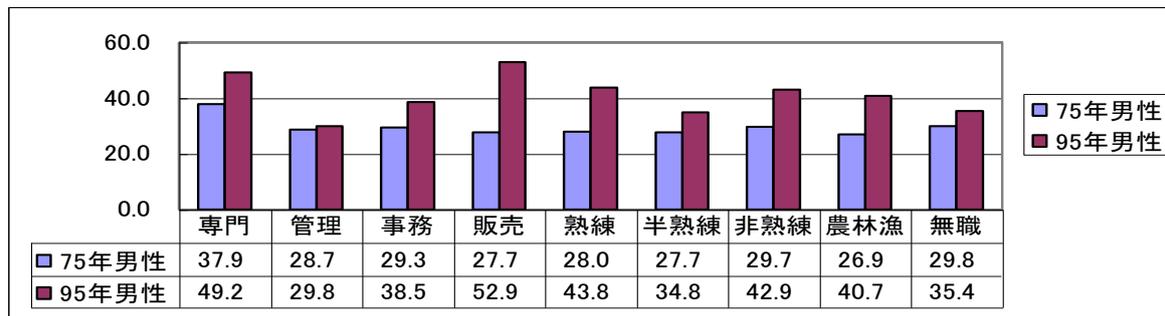
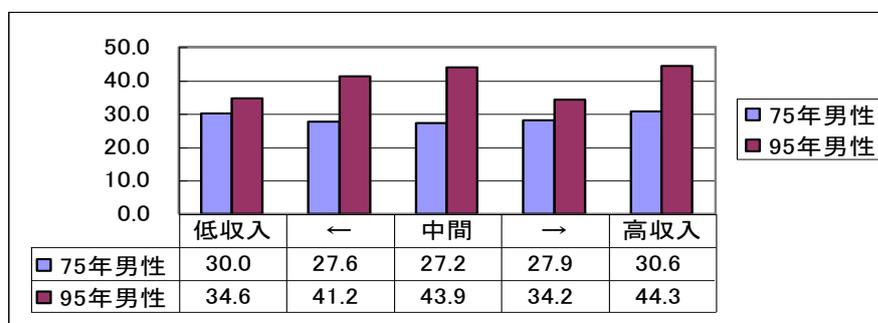


図4. 「職業に貴賤なし」(世帯収入別：5段階(周辺分布の5分位)、%)



注. 1975年：150万円未満、150～200万円未満、200～250万円未満、250～350万円未満、350万円以上。  
 1995年：400万円未満、400～500万円未満、500～800万円未満、800～1,100万円未満、1,100万円以上。

そこで、「職業に貴賤なし」についてロジット分析をすることにした。

従属変数は、評価パターンが「職業に貴賤なし」(すなわち<1 1 1 1>)であるか否かの2値である。なお、「職業に貴賤なし」変数は、「上層ホワイト」「一般ホワイト」「ブルー」「農林水産」という評価パターン(タイプ1)に基づくものと、1955年SSM調査の間35における職業カテゴリーから求めた評価パターン(タイプ2)に基づくものを両方分析してみることにした。比較対象とする職業カテゴリーが異なれば、「職業に貴賤なし」と判断するか否かも異なってくるだろうと考えたからである。このことは、職業カテゴリーの構成要素を変化させれば「職業に貴賤なし」の比率も変化することを示している表11(前掲)からも明らかなことである。

独立変数は、年齢(実数)・学歴(3段階：中卒以下・高卒・大卒以上)・世帯収入(カテゴリーの中位数を対数変換)である<sup>6)</sup>。

まず、評価パターン・タイプ1に基づく従属変数について分析してみた。表12は1975年データの結果、表13は1995年データの結果である。

1975年データの場合、このモデルに含めた独立変数の範囲では、危険率が10%水準でも

有意となる独立変数は1つも見出せない。なお、20%水準で見ると（丹後・山岡・高木 1996:199）、「学歴」が有意となる。基準とした「大卒以上」と比較すると、「中卒以下」では「職業に貴賤なし」と考える人が少なく、「高卒」では「大卒以上」と有意な差が見られない、という結果になっている。「職業に貴賤なし」と考える人は、高学歴層（「大卒以上」「高卒」）で比較的多く、低学歴層（「中卒」）で少ないという傾向が微弱ながら見出せるものと思われる。

表12. 「職業に貴賤なし」のロジスティック回帰分析(1975年SSM調査・男性)

Variable	B	S.E.	Wald	df	Sig	R	Exp(B)
年齢(実数)	-.0070	.0063	1.2267	1	.2681	.0000	.9930
学歴(3段階)			3.3826	2	.1843	.0000	
中卒以下	-.4791	.3227	2.2038	1	.1377	-.0118	.6194
高卒	-.2138	.3079	.4821	1	.4875	.0000	.8075
大卒以上(base)							
年齢×学歴			1.9127	2	.3843	.0000	
年齢×中卒以下	.0084	.0078	1.1583	1	.2818	.0000	1.0084
年齢×高卒	.0061	.0079	.5924	1	.4415	.0000	1.0061
世帯収入(5段階)			1.2597	4	.8682	.0000	
第1分位	.1002	.1179	.7222	1	.3954	.0000	1.1054
第2分位	-.0308	.1339	.0528	1	.8182	.0000	.9697
第3分位	-.0872	.1384	.3967	1	.5288	.0000	.9165
第4分位	-.0450	.1249	.1295	1	.7190	.0000	.9560
第5分位(base)							
定数項	-.6220	.2442	6.4870	1	.0109		
有効ケース数：1222／総ケース数：1296							
対数尤度の初期値 -2 Log Likelihood : 1465.5604							
Chi-Square df Significance							
対数尤度の改善度 7.320 9 .6039							
判別成功率：71.28%							

1995年データについても同様に分析をしてみた（表13）。

10%水準で有意なのは、「学歴」である。因果の方向は、基準とした「大卒以上」と比較して、「高卒」では「職業に貴賤なし」とする回答が多く見られるのに対し、「中卒以下」は「大卒以上」と有意差がない、という結果になっている。要するに、「職業に貴賤なし」と考える人は、「大卒以上」と「中卒以下」で比較的小なく、「高卒」に比較的多い、ということである。「年齢」「世帯収入」は有意ではない。

表13. 「職業に貴賤なし」のロジスティック回帰分析(1995年SSM調査・男性)

Variable	B	S.E.	Wald	df	Sig	R	Exp(B)
年齢(実数)	-.0074	.0091	.6567	1	.4177	.0000	.9926
学歴(3段階)			4.8739	2	.0874	.0380	
中卒以下	-.0342	.7764	.0019	1	.9649	.0000	.9664
高卒	.9643	.5472	3.1057	1	.0780	.0427	2.6230
大卒以上(base)							
年齢×学歴			3.0043	2	.2227	.0000	
年齢×中卒以下	.0017	.0142	.0139	1	.9062	.0000	1.0017
年齢×高卒	-.0172	.0110	2.4395	1	.1183	-.0269	.9830
世帯収入(5段階)			3.5704	4	.4673	.0000	
第1分位	-.2540	.1879	1.8273	1	.1764	.0000	.7757
第2分位	-.0319	.2514	.0161	1	.8989	.0000	.9686
第3分位	.1969	.1738	1.2828	1	.2574	.0000	1.2176
第4分位	-.0987	.2241	.1938	1	.6598	.0000	.9061
第5分位(base)							
定数項	-.1234	.4682	.0694	1	.7921		

有効ケース数：453／総ケース数：566

対数尤度の初期値 -2 Log Likelihood : 606.17998

Chi-Square df Significance

対数尤度の改善度 12.959 9 .1645

判別成功率：60.71%

ここで、従属変数を、1955年SSM調査の間35における職業カテゴリーに基づいて算出した「職業に貴賤なし」(SSM55年タイプ)に変更し、まったく同じモデルについて分析をしてみた。

1975年の場合、1%水準で「年齢」が有意となり、10%水準では「中卒以下」が有意となる。「職業に貴賤なし」と考える人は、「若年層」ほど多く、「大卒以上」ならびに「高卒」の人に比較的多く、「高年齢層」ならびに「中卒以下」の人ほど少なかった、ということがわかる(表14)。

1995年の場合、5%水準で有意なのは「高卒」ダミーであり、「大卒以上」と比較すると「高卒」では「職業に貴賤なし」と考える人が多く、「中卒以下」の回答パターンは「大卒以上」と有意差がない、という結果になっている。「大卒以上」と「中卒以下」が同様の回答をする点は1975年調査と同じであるが、1975年調査ではこれらの人々は「職業に貴賤なし」と考える人が比較的多かったのに対し、1995年にはむしろ相対的に少なくなっている点に変化が見られる。なお、1975年調査データでは有意であった「年齢」は、1995年データでは有意ではなくなった(表15)。

以上から、1975年データに関しては学歴に関してのみ、国民性調査と同様の結果が得られた。これは、安田仮説の前半部分のみ(「社会階層の上層に位置するものにとっての保身のイデオロギー装置」仮説)を支持する結果にもなっている。しかし、1995年データに関しては、それとは異なる結果が見出された。また、安田仮説の後半部分(「下層に位置するものにとっての自尊心維持装置」仮説)は、1975年データでも1995年データでも棄却された。ただし、ここでは十分な検討をしたとは言い難いので、今後さらに詳細な分析が必要と思われる。

表14. 「職業に貴賤なし」(SSM55年タイプ)のロジスティック回帰分析(1975年SSM調査・男性)

Variable	B	S.E.	Wald	df	Sig	R	Exp(B)
年齢(実数)	-.0343	.0114	9.0672	1	.0026	-.0927	.9663
学歴(3段階)			4.2159	2	.1215	.0162	
中卒以下	-.9121	.5008	3.3169	1	.0686	-.0400	.4017
高卒	-.3232	.4758	.4616	1	.4969	.0000	.7238
大卒以上(base)							
年齢×学歴			3.9482	2	.1389	.0000	
年齢×中卒以下	.0250	.0133	3.5236	1	.0605	.0430	1.0254
年齢×高卒	.0115	.0135	.7212	1	.3958	.0000	1.0116
世帯収入(5段階)			2.0145	4	.7331	.0000	
第1分位	-.2366	.1832	1.6677	1	.1966	.0000	.7893
第2分位	-.0170	.1918	.0078	1	.9295	.0000	.9832
第3分位	.0201	.1944	.0107	1	.9177	.0000	1.0203
第4分位	.0653	.1812	.1298	1	.7186	.0000	1.0674
第5分位(base)							
定数項	-.8595	.3882	4.9026	1	.0268		

有効ケース数：1179／総ケース数：1296  
 対数尤度の初期値 -2 Log Likelihood : 822.54608  
 Chi-Square df Significance  
 対数尤度の改善度 14.577 9 .1032  
 判別成功率：88.89%

表15. 「職業に貴賤なし」(SSM55年タイプ)のロジスティック回帰分析(1995年SSM調査・男性)

Variable	B	S.E.	Wald	df	Sig	R	Exp(B)
年齢(実数)	-.0073	.0110	.4387	1	.5077	.0000	.9927
学歴(3段階)			5.9797	2	.0503	.0656	
中卒以下	-.0049	.9233	.0000	1	.9957	.0000	.9951
高卒	1.2914	.6491	3.9585	1	.0466	.0652	3.6379
大卒以上(base)							
年齢×学歴			4.8954	2	.0865	.0441	
年齢×中卒以下	.0017	.0170	.0100	1	.9202	.0000	1.0017
年齢×高卒	-.0266	.0133	3.9992	1	.0455	-.0659	.9737
世帯収入(5段階)			2.8521	4	.5829	.0000	
第1分位	-.1165	.2289	.2589	1	.6109	.0000	.8901
第2分位	.0448	.2994	.0224	1	.8811	.0000	1.0458
第3分位	.2565	.2063	1.5457	1	.2138	.0000	1.2924
第4分位	-.3325	.2997	1.2306	1	.2673	.0000	.7172
第5分位(base)							
定数項	-.0648	.5639	3.5654	1	.0590		

有効ケース数：454／総ケース数：566  
 対数尤度の初期値 -2 Log Likelihood : 460.39886  
 Chi-Square df Significance  
 対数尤度の改善度 12.711 9 .1761  
 判別成功率：79.52%

以上の結果を踏まえて、「職業に貴賤なし」と思うか否かと年齢と学歴で3重クロス集計をおこなった。1975年調査の場合、最も多いのは20代大卒の36.9%、最も少ないのは30代中卒の24.1%となっている(表16)。1995年調査の場合、ケース数の少ないセルを無視すると、最多なのは30代高卒の50.0%あり、最少なのは60代中卒の36.4%である(表17)。

表16. 「職業に貴賤なし」の比率（1975年S SM調査・男性：年齢・学歴別、%）

	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
中卒以下	32.9	24.1	24.7	25.8	31.5
高卒	29.6	27.6	33.7	26.3	32.4
大卒以上	36.9	32.6	35.3		(33.3)
年齢層計	32.3	27.0	29.0	24.5	31.9

注. 比率の基数が20未満のセルの値は（ ）で括った。

表17. 「職業に貴賤なし」の比率（1995年S SM調査：男性・年齢・学歴別、%）

	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69
中卒	(40.0)	(33.3)	(50.0)	35.9	36.4
高卒	47.1	50.0	46.9	40.3	(31.8)
大卒	23.7	40.0	42.1	(50.0)	(15.4)
年齢層計	35.1	45.7	45.0	40.2	32.1

注. 比率の基数が20未満のセルの値は（ ）で括った。

表16と表17から、男性について出生コーホート別に1975年時点と1995年時点の各学歴層における「職業に貴賤なし」の比率を示したのが表18である。

表18. 「職業に貴賤なし」の比率（1995年S SM調査・男性：出生コーホート・学歴・調査年別、%）

	1926-1935年生れ			1936-1945年生れ			1946-1955年生れ		
	中卒	高卒	大卒	中卒	高卒	大卒	中卒	高卒	大卒
1975年	24.7	33.7	35.3	24.1	27.6	32.6	32.9	29.6	36.9
1995年	36.4	(31.8)	(15.4)	35.9	40.3	(50.0)	(50.0)	46.9	42.1
増減	+11.7	- 1.9	-19.9	+11.8	+12.7	+17.4	+17.1	+17.3	+ 5.2

注. 比率の基数が20未満のセルの値は（ ）で括った。増減は、1995年の値から1975年の値を減じた結果。

## 10. 「職業に貴賤なし」と職業威信スコアの関係

最後に、「職業に貴賤なし」と考える人と、そうは考えない人とで、個々の職業の評価がどの程度異なるのかを確認するために、回答者を「職業に貴賤はない」と考えるか否かにわけた上で、職業威信スコア（評定得点の平均値）を算出してみた。表19は1975年データの結果、表20は1995年データの結果である。

### 10.1. 1975年データの場合

「貴賤あり」と考える人の威信スコアの最大値・最小値とレンジ（最大値と最小値の差）は、それぞれ順に90.8、16.6、74.2である。また、威信スコアの平均値は49.5、標準偏差は18.9となっている。他方、「貴賤なし」と考える人威信スコアの最大値・最小値とレンジ（最大値と最小値の差）は、順に78.5、40.3、38.2である。また、威信スコアの平均値は52.9、標準偏差は8.5となっている。「貴賤なし」と考える人は、「貴賤あり」と考える人と比べると、威信スコアの高い職業を低めに、低い職業を高めに評価しており、スコアの絶対値は「貴賤あり」と考える人と異なっている。表から威信スコアの差の絶対値を求め、その平均

値を計算すると、9.8点となる。「職業に貴賤なし」と考える人の場合、職業カテゴリー間に大きな評定差をつけないのであるから、レンジや標準偏差が「貴賤あり」の人より小さいのは当然であるが、レンジは36.0点も小さく、標準偏差も半分以下という違いが見られる。なお、「貴賤あり」の威信スコアと「貴賤なし」の威信スコアの相関係数は .964であり、順位相関係数は .970である。「職業に貴賤なし」と考えるか否かによって職業の威信の序列はほとんど異ならないが、スコアの差は少なくない。特に、威信スコアの両端に近づくほど、両者のスコアの差は大きくなるのがわかる。

#### 10.2. 1995年データ の場合

「貴賤あり」と考える人の威信スコアの最大値・最小値とレンジ（最大値と最小値の差）は、それぞれ順に 95.5、30.4、65.1である。また、威信スコアの平均値は 57.4、標準偏差は 17.1となっている。他方、「貴賤なし」と考える人威信スコアの最大値・最小値とレンジ（最大値と最小値の差）は、順に 82.8、44.7、38.2である。また、威信スコアの平均値は 56.1、標準偏差は 9.0となっている。表から威信スコアの差の絶対値を求め、その平均値を計算すると、7.8点となる。なお、「貴賤あり」の威信スコアと「貴賤なし」の威信スコアの相関係数は .951、順位相関係数は .957である。「貴賤あり」と「貴賤なし」を比較すると、①「貴賤なし」の人は「貴賤あり」の人よりも高威信の職業を低めに、低威信の職業を高めに評価する、②「威信なし」のレンジや標準偏差は「威信あり」のそれらよりも小さい、といった特徴は、1975年調査の結果と共通である。

#### 10.3. 職業威信スコアの頑健性

職業威信スコアは頑健であると言われている。本研究では、4つの職業カテゴリーを同列に評価する評定パターン（「職業に貴賤なし」）を採るか否かで回答者を分断し、両者について職業威信スコアを求め、その相関係数を計算したわけだが、相関係数は1975年調査だと .96～.97、「貴賤なし」が増加した1995年でも .95と高い値を示している。これは、「貴賤あり」の大部分が<1 2 2 2>という評定パターンによって占められており、それが「貴賤なし」の<1 1 1 1>という評定パターンと類似していることによるものと考えられる。「貴賤の有無」ではなく、評定パターンそのもので回答者をわけた上で職業威信スコアを求めれば、それらのあいだの相関は低くなるのが予想される。たとえば、「貴賤あり」と考える人のうち、<1 2 2 2>以外の評定パターンで比較的多く見られる<1 2 3 4>について求めた職業威信スコアの場合、評定パターン<1 1 1 1>の職業威信スコアとの相関係数は .911、順位相関係数は .916となる。しかし、その他の評定パターンは現頻度が少なく、いずれも数パーセントにとどまるため、社会全体における職業評価に及ぼす影響も小さいと思われる。主要な評定パターンが<1 1 1 1>×<1 2 2 2>×<1 2 3 4>の3種類しかなく、これらのあいだの相関が 0.91以上と高いことによって、職業威信スコアの頑健性はもたらされているものと考えられるのである。

表19. 「職業に貴賤なし」別に算出した職業威信スコア（1975年SSM調査：男性のみ）

SSM75 問4番号	職業名	「貴賤あり」		「貴賤なし」		なしーあり スコア差
		スコア	標準偏差	スコア	標準偏差	
54	裁判官	90.8	16.5	78.5	21.1	-12.4
1	大会社の社長	87.9	19.1	72.6	23.3	-15.3
24	大学教授	87.2	18.6	74.5	19.5	-12.7
66	国会議員	86.5	21.1	67.8	25.0	-18.7
12	医師	86.1	17.9	74.3	18.6	-11.9
42	高級官僚	85.5	20.1	68.6	21.4	-16.8
21	パイロット	78.4	19.4	66.5	19.1	-11.9
43	大型船の船長	78.0	19.4	67.0	18.7	-11.0
58	小中学校の校長	76.6	17.3	66.3	17.8	-10.3
75	公認会計士	76.4	18.5	64.7	17.0	-11.7
53	作家	73.3	21.1	62.4	20.3	-10.9
80	司法書士	73.0	19.3	63.7	17.6	- 9.3
74	大会社の課長	68.9	16.9	58.7	16.4	-10.2
17	薬剤師	68.1	17.8	58.8	16.8	- 9.4
48	音楽家	68.0	20.4	60.3	19.6	- 7.8
25	新聞記者	66.7	20.2	59.4	18.1	- 7.3
14	中小企業の経営者	64.8	18.8	58.6	17.1	- 6.2
44	小学校の教諭(先生)	64.3	18.0	59.7	17.5	- 4.6
82	土木建築技術者	64.2	17.9	59.0	15.6	- 5.2
26	レントゲン技師	62.4	19.3	58.7	17.1	- 3.8
72	機械工業技術者	62.4	18.7	57.7	16.9	- 4.7
16	スケジュールデス	62.3	20.2	56.3	18.0	- 6.0
68	市役所の課長	62.1	17.5	56.1	15.0	- 6.0
10	大会社の企画・営業担当社員	61.3	18.6	56.6	16.9	- 4.7
47	プロスポーツ家	60.7	22.9	52.0	17.0	- 8.7
64	寺の住職	60.0	22.6	55.5	18.9	- 4.5
37	工場や現場の監督者	58.3	17.5	55.7	14.6	- 2.6
57	無線通信士	58.1	17.2	55.4	14.8	- 2.7
38	デザイナー	58.0	19.7	52.2	16.4	- 5.8
34	漁船の船長	57.6	19.3	56.6	16.5	- 1.0
41	中小企業の課長	57.0	16.4	53.2	14.6	- 3.8
15	プログラマー	56.0	22.2	51.1	16.8	- 4.9
39	警官	54.0	19.2	54.6	17.6	0.6
81	卸売店主	52.9	18.5	51.8	13.5	- 1.1
19	看護婦	52.6	19.0	53.2	17.5	0.6
76	電機機関士	51.2	18.3	53.3	13.8	2.1
60	製図工	50.6	19.1	51.5	13.5	0.9
33	保母	49.5	18.5	52.9	15.3	3.4
62	会計事務員	48.7	15.3	51.2	11.9	2.4
65	小売店主	48.4	17.2	50.3	12.5	1.9
56	船舶機関員	47.4	17.3	49.9	12.5	2.4
7	タイピスト	46.5	17.7	49.8	13.3	3.3
13	化学薬品製造工	45.1	20.8	51.1	14.1	6.0
45	理容師	43.0	17.5	49.7	13.7	6.7
6	大工	42.9	19.4	51.4	14.4	8.5
30	鉄道の駅員	42.7	18.5	49.3	13.0	6.5
49	自作農	41.6	21.2	53.4	12.9	11.8
79	中小企業の一般事務員	41.0	16.0	48.4	10.8	7.4
70	洋服仕立職	40.7	17.7	48.3	12.5	7.6
22	セールスマン	40.3	19.1	47.3	14.7	7.0
71	指物師	40.1	18.8	48.9	14.3	8.8

51	電話交換手	39.9	19.1	47.9	14.3	8.0
27	自動車修理工	39.2	18.9	50.9	14.1	11.7
18	質屋	39.1	21.0	43.1	17.5	4.1
61	車掌	38.2	18.3	47.2	13.8	9.0
11	レストランのコック	38.0	20.0	47.4	15.3	9.4
4	電気工事人	37.7	19.0	50.0	14.5	12.3
55	自動車運転手	37.1	18.8	49.2	13.9	12.1
78	テレビ組立工	36.8	18.9	48.4	12.4	11.7
3	左官	36.7	19.9	47.6	14.6	10.9
32	郵便配達人	36.2	18.6	48.7	15.0	12.5
20	石工職	36.0	20.6	48.1	15.5	12.1
50	印刷工	33.5	18.4	47.8	12.2	14.3
2	旋盤工	33.2	19.0	47.3	15.9	14.2
63	パン製造工	32.2	17.9	47.7	13.4	15.5
73	保険の勧誘員	31.6	20.4	44.7	15.9	13.1
28	旅館の番頭	31.6	19.7	44.0	15.6	12.4
59	商店の店員	31.3	18.8	45.7	14.0	14.4
29	漁業者(漁師)	30.8	19.7	48.5	13.5	17.7
40	食品缶詰工	29.0	19.0	47.1	14.4	18.1
35	集金人	28.4	18.9	43.2	15.5	14.8
46	守衛	27.8	19.7	43.6	16.7	15.8
31	列車ボーイ	27.6	18.6	42.8	15.2	15.2
52	紡績工	27.6	19.2	44.9	13.7	17.3
8	ウェイトレス	27.4	18.8	41.5	16.5	14.1
36	小作農	23.6	21.7	44.3	16.2	20.7
5	行商人	22.9	19.8	41.0	16.6	18.1
77	大工見習	22.6	19.4	41.1	16.5	18.5
23	採炭夫	21.7	20.2	44.1	18.2	22.4
69	運搬人	20.9	19.0	42.5	16.8	21.6
67	道路工夫	20.8	19.8	41.3	18.3	20.5
9	炭焼夫	16.6	18.8	40.3	18.9	23.7
	最大値	90.8	22.9	78.5	25.0	23.7
	最小値	16.6	15.3	40.3	10.8	0.6
	レンジ	74.2	7.6	38.2	14.2	23.1
	平均値	49.5	19.0	52.9	16.0	9.8
	標準偏差	18.9	1.4	8.5	2.6	5.8

註. 「貴賤あり」の威信スコアの高い順に職業を配列した。

「スコアの差」欄の最大値・最小値・レンジ・平均値・標準偏差は、スコアの差の絶対値から算出した。

表20. 「職業に貴賤なし」別に算出した職業威信スコア（1995年SSM調査：男女計）

SSM95 問3番号	職業名	「貴賤あり」		「貴賤なし」		なしあり スコア差
		スコア	標準偏差	スコア	標準偏差	
7	医師	95.5	10.2	82.8	17.0	-12.6
32	裁判官	92.6	13.0	79.2	18.6	-13.4
1	大会社の社長	92.3	13.7	80.4	18.1	-11.9
15	大学教授	90.0	15.0	76.5	16.7	-13.5
35	パイロット	88.9	15.3	73.6	17.4	-15.3
24	高級官僚	84.2	19.6	68.2	19.7	-16.0
41	国会議員	81.6	21.6	65.6	20.9	-16.0
10	建築士	76.7	15.4	65.4	15.0	-11.3
50	公認会計士	76.1	15.6	63.6	14.0	-12.5
9	スチュワーデス	74.3	17.4	64.0	15.1	-10.4

27	プロスポーツ選手	73.8	20.4	62.3	16.6	-11.5
8	中小企業の経営者	71.7	16.0	65.0	14.8	- 6.7
56	音楽家	71.3	15.8	60.2	14.0	-11.2
53	自動車設計技術者	71.1	15.4	59.8	13.4	-11.4
52	薬剤師	69.5	15.3	60.6	13.3	- 8.9
21	服飾デザイナー	68.7	15.4	58.9	13.2	- 9.9
47	大会社の課長	67.8	14.7	56.9	11.9	-10.9
25	小学校の教諭(先生)	66.9	16.0	59.0	13.8	- 7.9
38	寺の住職	63.7	19.9	55.6	14.3	- 8.1
43	市役所の課長	60.3	15.0	52.2	8.7	- 8.1
11	看護婦	59.8	17.9	59.6	15.7	- 0.2
22	警察官	59.5	16.8	55.6	12.5	- 3.9
39	銀行員	59.2	14.6	52.6	8.8	- 6.6
23	中小企業の課長	58.7	14.8	52.6	8.8	- 6.1
6	大会社の営業担当社員	58.6	15.5	55.6	11.9	- 3.0
20	土木・建築の現場監督	58.5	15.4	54.2	10.4	- 4.3
51	卸売店主	54.1	13.6	51.1	6.0	- 3.1
19	保母	53.2	14.9	52.4	9.5	- 0.8
4	大工	52.2	17.8	54.3	11.3	2.1
40	小売店主	51.6	13.4	50.9	7.3	- 0.7
48	電車運転士	51.2	12.6	51.5	7.5	0.3
44	家具職人	51.1	15.8	53.4	9.4	2.3
3	レストランのコック	51.0	15.0	52.3	10.3	1.3
12	大企業の機会組立工	49.7	16.2	53.0	11.2	3.3
2	電気工事人	49.1	14.4	52.3	10.8	3.2
54	銀行の窓口係	48.8	11.6	50.2	7.2	1.3
26	理容師(理髪師)	48.4	13.6	51.4	7.3	3.0
33	バス運転手	47.5	13.3	50.9	8.1	3.4
17	鉄道の駅員	46.0	12.9	50.3	6.9	4.3
13	自動車セールスマン	45.6	13.5	49.4	8.8	3.8
49	中小企業の事務員	44.8	12.5	49.9	6.0	5.1
46	自動車修理工	44.4	14.2	50.1	6.4	5.7
18	郵便配達人	44.0	14.0	49.4	7.5	5.4
28	中小企業の機械組立工	43.4	16.5	51.2	9.6	7.8
16	漁業者(漁師)	43.0	19.2	51.4	8.6	8.5
45	保険の勧誘員	41.3	15.8	48.2	9.3	6.9
29	農業	41.1	20.7	51.7	9.0	10.6
37	パン製造工	40.8	15.3	49.9	7.0	9.1
30	印刷工	40.1	15.9	49.4	7.1	9.3
36	商店の店員	38.0	15.7	48.5	8.0	10.6
55	食品缶詰工	37.8	15.2	48.1	8.6	10.3
31	紡績工	36.9	17.0	48.8	8.0	11.9
34	守衛	34.4	17.4	47.3	10.4	12.9
5	ウェイトレス	33.3	16.4	44.7	11.3	11.4
42	道路工夫	32.7	19.4	47.5	9.9	14.8
14	炭坑夫	30.4	20.0	45.2	13.5	14.9
	最大値	95.5	21.6	82.8	20.9	16.0
	最小値	30.4	10.2	44.7	6.0	0.2
	レンジ	65.1	11.4	38.2	15.0	15.8
	平均値	57.4	15.7	56.1	11.4	7.8
	標準偏差	17.1	2.3	9.0	3.8	4.5

註. 「貴賤あり」の威信スコアの高い順に職業を配列した。

「スコアの差」欄の最大値・最小値・レンジ・平均値・標準偏差は、スコアの差の絶対値から算出した。

## 11. 結論

本研究では、1955年・1975年・1995年SSM調査データを利用して、日本人の職業評価パターンについて見てきた。職業威信スコアを利用した従来の研究とは異なり、職業評定パターンに着目することにより、いくつかの新たな発見がなされた。本研究で明らかにした主なことを要約すれば以下のとおりである。

### 職業評定パターンについて:

- ① 職業評定パターンの数は、職業を「上層ホワイト」「一般ホワイト」「ブルーカラー」「農林水産業」という4カテゴリーにした場合、1975年では男性だと30通りであったが、1995年には男性22通り、女性19通りとなった。
- ② 最も多く見られる評定パターンは、1975年も1995年も、すべてを同列に評価する「職業に貴賤なし」パターンである。その比率は、1975年（男性）では28.4%、1995年では男性だと39.4%、女性だと42.6%である。
- ③ 上層ホワイトカラーを第1位、一般ホワイトカラーを第2位、ブルーカラーを第3位、農林水産業を第4位に評価する人は、1975年では男性だと13.0%、1995年では男性だと10.1%、女性だと9.6%しかいない。
- ④ 評定パターンにおいて使用されるランク数は、1975年から1995年にかけて減少した。4つの職業カテゴリーを4段階に評定した男性は、1975年だと30.2%であったが、1995年だと20.0%となっている。
- ⑤ 専門・管理・事務のあいだの「ランク格差縮小仮説」（盛山・直井・佐藤・都築・小島 1990:42）を職業評定という主観のレベルにおいて裏付けることができた。

### 「職業に貴賤なし」意識について:

- ⑥ 「職業に貴賤なし」と考える人は、1975年から1995年にかけて増加した。職業を「上層ホワイト」「一般ホワイト」「ブルーカラー」「農林水産」の4カテゴリーにわけた場合、1975年には28.4%であったものが、1995年には39.4%となった。また、1955年から見ても増加したと推測される。職業を「物を作っている人々」「物を売り買いする人々」「学者や芸術家」「役人や議員」の4カテゴリーにわけると、1955年には4.1%、1975年には10.7%であったものが、1995年には22.1%となる。
- ⑦ 「職業に貴賤なし」の比率が増加傾向を示していることから、人々の意識の中では職業間の格差は縮小傾向にあると推測できる。
- ⑧ 「職業に貴賤なし」と考える人は、1975年までは大卒・高卒に多く、中卒以下では少なかったが、1995年SSM調査の結果によると高卒で多く、大卒ならびに中卒以下で少ない。
- ⑨ 「職業に貴賤なし」と考える人と、そのように考えない人において職業威信スコアを求めたところ、両者のスコアは異なるものの、相関は高いことが見出された。

本研究には下記の限界や問題点もある。

第1に、「職業に貴賤なし」という考え方が発生するメカニズムについては、利用できるデータに質問項目の数と種類が限られていることもあり、本研究では十分に明らかにすることができなかった。「職業に貴賤なし」と考える人が増大した原因としては、①平等主義が強まった、②実際に平等化が進行した、③人々が格差を認知しにくくなった、などの説明が可能である。本研究では、これらのうちのいずれが支持されるのかまでは明らかにし得なかった。

第2に、「職業に貴賤なし」と考えるか否かには学歴が影響していることが見出されたが、1975年と1995年では影響の仕方に変化が見られた。このことは何を意味するのだろうか。高学歴層や高等教育が、理想主義から現実主義へ変化したのだろうか。これらについても本研究では明らかにし得なかった。

第3に、アприオリな職業カテゴリーのまとめ方についても検討の余地がある。本研究におけるものとは異なる職業から構成された職業カテゴリーについても評価パターンを作成し、検討することが必要だろう。

第4に、そもそもアприオリな職業カテゴリーではなく、個々の職業評価の類似性に基づいた職業カテゴリーについても同様に検討してみることが必要だろう。

以上のような問題点や限界はあるものの、職業評価パターンに着目することによって、「ホワイトカラー」（あるいは「上層ホワイトカラー」）を最も高く位置付け、次いで「ブルーカラー」を、そして「農林水産業」を最も低く位置付ける、という職業カテゴリーについての研究者のアприオリな序列付けパターンが、人々の意識の中ではほとんど共有されていないことを明らかにすることができた。

研究者がなんらかの職業カテゴリーのあいだでの上昇移動や下降移動を問題にするのは、人々のあいだにその職業カテゴリーに関する望ましさの観念があるであろうことを想定しているからであり、高い職業的地位という希少な社会的資源をめぐる獲得競争が社会に存在していることを想定しているからでもあろう。しかし、研究者の想定するアприオリな職業カテゴリーやアприオリな序列が、人々に共有されていないならば、あるいは、共有しない人が少なからず存在するならば、そのような想定をすることの意味を考え直す必要があるのではないだろうか。

## 註

1) SSM調査における職業評価の項目では自営業か否かを識別していないため、SSM職業総合分類に合わせた職業カテゴリーの序列付けを作成することは不可能である。そこで、本研究では、次善の策としてSSM職業大分類を更に集約した職業4分類（タイプ1）を検討することにした。SSM職業総合分類ならびにSSM職業大分類については、原(1995:101-105)を参照。

2) 「問33については、1955年調査実施直後の分析においてと思われるが、調査票が切断されており、データが残存していないのでコードしなかった。」(SSMトレンド分析研究会 1994『1955年SSM調査 1980-

1981年度再コーディング コード・ブック』31頁)

- 3) 尾高[1958:45-46]によって報告されている数値とは微妙に異なるが、その原因は不明である。欠損値の処理などによるものであろうか。
- 4) いずれも男女計の比率。なお、1958年調査で16%と大きく落ち込んでいる理由は不明である。ちなみに、SSM調査でも1955年には4.1%と低い比率となっている。1950年代後半に「職業に貴賤なし」という考え方を否定させる何らかの事情があったのかもしれないが、この点については検討しない。
- 5) 「管理職」については、1995年SSM研究会(1996:114)にしたがってコードし直したものを使っている。
- 6) SSM職業8分類による職業変数を独立変数として入れてみても、有意なものは見出せなかった。

## 文献

- Blau, Peter M. & Otis Dudley Duncan. 1967. *The American Occupational Structure*, The Free Press.
- 原純輔. 1997. 「戦後日本の階層と階層意識—SSM調査1955-1995年の軌跡—」『行動計量学』24-1(46):11-19.
- 鹿又伸夫. 1997. 「戦後日本における世代間移動の変動」『行動計量学』24-1(46):20-27.
- 尾高邦雄. 1958. 「職業と社会的地位」尾高邦雄(編) 1958 『職業と階層』(毎日ライブラリー)、毎日新聞社。
- 盛山和夫・直井優・佐藤嘉倫・都築一治・小島秀夫. 1990. 「現代日本の階層構造とその趨勢」直井優・盛山和夫(編)『社会階層の構造と過程』(現代日本の階層構造: 1)、東京大学出版会。
- 徳安彰. 1986. 「日本における産業化と世代間移動の趨勢」富永健一(編)『社会階層の趨勢と比較』、SSM趨勢と比較研究会。
- 富永健一. 1979. 「社会階層と社会移動の趨勢分析」富永健一(編)『日本の階層構造』、東京大学出版会。
- 富永健一. 1992. 「戦後日本の社会階層とその変動 1955-1985年」東京大学社会科学研究所(編)『問題の諸相』(現代日本社会: 6):429-495、東京大学出版会。
- 統計数理研究所. 1994. 『国民性の研究 第9回全国調査—1993年全国調査—』(統計数理研究所研究レポート: 75)、統計数理研究所。
- 統計数理研究所国民性調査委員会. 1970. 『第2 日本人の国民性』至誠堂。
- 統計数理研究所国民性調査委員会. 1975. 『第3 日本人の国民性』至誠堂。
- 安田三郎. 1971. 『社会移動の研究』(東大社会科学叢書: 37)、東京大学出版会。
- 1995年SSM調査研究会(編). 1996. 『1995年SSM調査コード・ブック』、1995年SSM調査研究会。